

## (16) サンティアゴに感謝の挨拶

10月28日(日)、パドロン(第一回(1)に記した)から帰った土曜の夜の街は賑やかだった。日が替わって午前1時、“サマータイム”が解除され時計の針が0時に逆戻りする。1時間得したとばかりに飲み歩く若者の歌声が朝まで続いた。眠れなくて早朝に一人ベッドを抜け出し、清掃車が洗い清めた石畳の路地を大聖堂へ向かう。と、旗を持った女性のガイドに引率されて20人程の日本人観光客が疲れた顔して通り過ぎた。過日、巡礼の途中で出会ったドイツ人の団体は観光バスから降り、僅かな距離だけど歩いて巡礼体験していたが、この日本人の団体はどうだったのだろうか。大聖堂前の広場は市民マラソンのゴールになるのだろう、会場造りが始まっていた。

やり残していたことがあった。大聖堂に入った。観光客の人影は少なかった。中央祭壇の聖室上方から黄金色のサンティアゴがこちらを見下ろしている。ここを訪れた人々は祭壇横の狭い階段を行列してサンティアゴ像の背後まで上り、その背後からハグしたり背中や肩に手を置いて挨拶する。それから祭壇下の地下室まで階段を降り、そこに安置されている銀色の棺に眠るサンティアゴを墓参する。人影が少ない早朝、やり残していたこと全てを静かに果たした。



大聖堂中央祭壇上のサンティアゴ

肩に手を置いて挨拶する (2003/3 初めて訪れた時)

ミサが始まるまでの時間、大聖堂に隣接する巡礼博物館に入ってみた。屋上から見下ろすと、広場には市民マラソンのゴールを見ようと人々が集まっていた。その人々の背後には、今日も、一人、二人と到着してくる巡礼者の姿があった。静かな日曜の朝、もう出発時間に追われることもなく、ただ一人、サンティアゴの家並みをぼんやり眺めていた。(写真次頁)

12時、再び四人揃って、パイプオルガンが地鳴りのように響く中、巡礼最後の感謝の祈りを捧げた。この日、ボタフメイロの香は焚かれなかった。(つづく)

